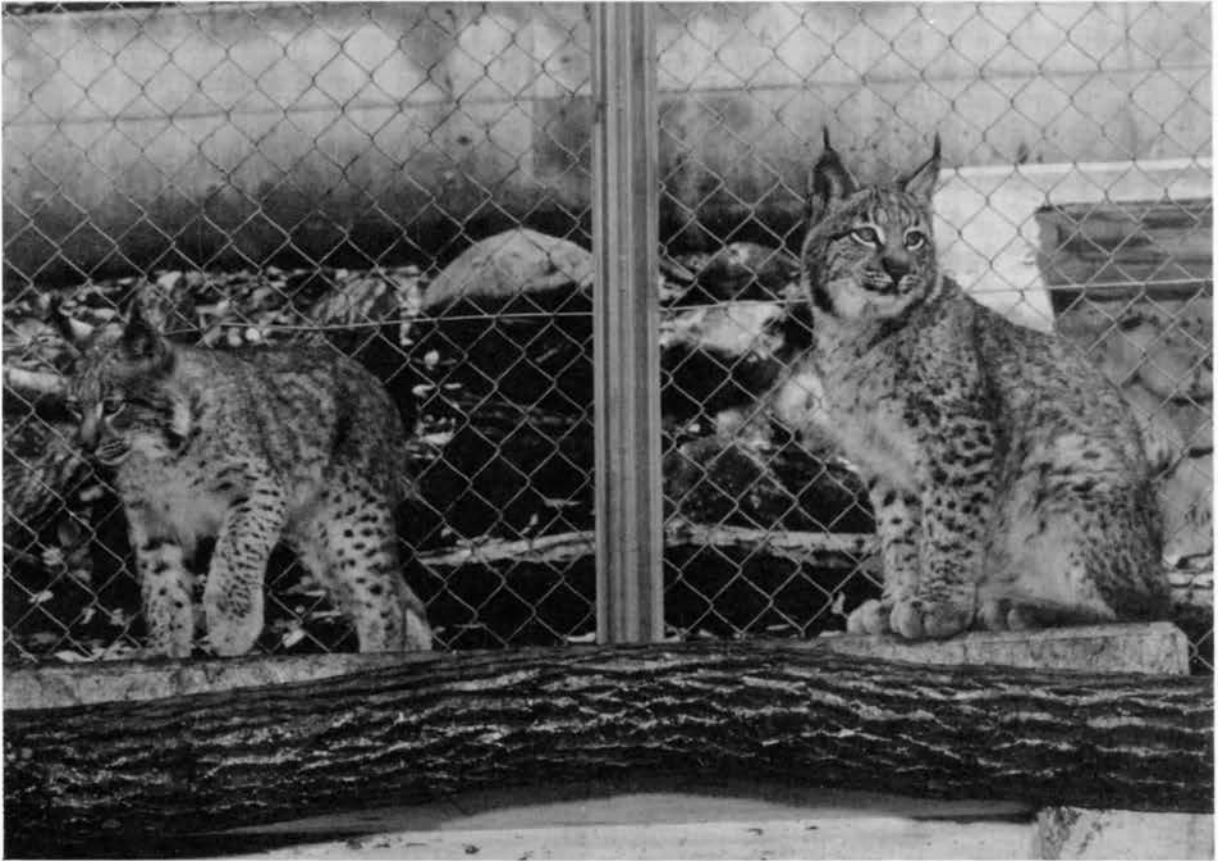


山と博物館

第36巻 第11号 1991年11月25日 大町山岳博物館



シベリアオオヤマネコ

ヤマネコがやって来た

大町市と友好提携を結んでいるオーストリアのインスブルック市へ腰原市長をはじめとする訪問団が表敬訪問したのは、平成三年六月のことです。この時、山岳博物館創立四十周年の招待状を携え、山岳博物館と友好提携しているアルペン動物園へも訪問しました。ニーシャー市長、ベヒラーナー園長たちの歓迎を受け友好の絆がますます深まり、山岳博物館四十周年の記念としてシベリアオオヤマネコをプレゼントしたいとの提案がありました。

シベリアオオヤマネコはアルプス山脈などの森林地帯や、シベリア、ヒマラヤ山脈などにすみ、群れを作らないで単独で暮らし、森林を生活の場所としています。鋭い視覚と嗅覚をたよりにえものを追跡したり、木の上にひそんで待ち伏せしたりするのです。

美しい毛皮のため捕獲された時代があり、森林の伐採と耕地化によってすみかを追われたりして、その数も減少してきた動物です。現在は必ずしも絶滅のおそれはないが存続を脅かすような利用を避けようというところで、ワシントン条約にも取りこまれていて、今回はオーストリア政府の許可を得て大町にやって来ることになりました。

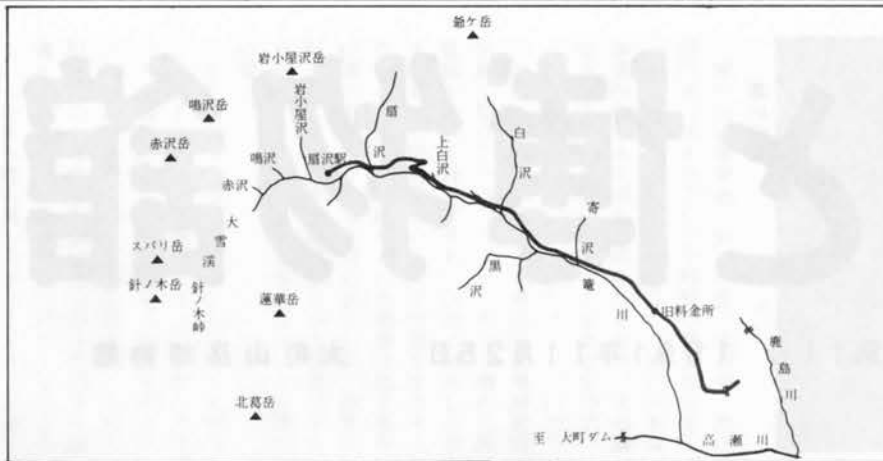
十月三十日、山岳博物館にやってきた二頭のシベリアオオヤマネコは生後七カ月の幼獣です。オスとメスのツガイでひとつのバスケットに入ってきました。一頭はアルペン動物園で生まれ、もう一頭はドイツのハーゲンベック動物園生まれです。アルペン動物園でお見合いをしたあと別々のバスケットに入れて輸送しようとしたところ、この二頭は離れようとせず、ヨーロッパからの長旅をひとつのバスケットの中で過ごしてきたそうです。

極寒の地域で生活する動物ですので、日本の冬は問題なく過ごせるとのこと。体長約六十センチのこのシベリアオオヤマネコは今、食欲旺盛です。仲良く並んで休む二頭は付属園の新たな人気物となるでしょう。

(大町山岳博物館)

大町の河川② 籠川あれこれ

榊原邦夫



籠川水系

籠川は信濃川水系の二次支川高瀬川の支流で大町市街の西方、高瀬川の左岸に位置する。源を針ノ木岳とし岩小屋沢・扇沢・白沢・黒沢他が流入して高瀬川に合流している。籠川谷は、扇沢バスターミナルからトロリーバスで黒四ダム・室堂・立山へのアルペンルートとして、また扇沢より北アルプス爺ヶ岳への登山ルートとして、そして百瀬慎太郎の名前とともに針ノ木雪渓があることで有名である。また古くは佐々成政の黒部越えでも知られている。

扇沢には年間百数十万の観光客が訪れるが、今まであまり市民には親しみがなかった。理由は、昭和三十年代の黒四ダム建設に始まり、平成二年の秋まで県企業局により有料道路として利用され自由に往来出来なかつたからで、これからは市民の憩いの場所としての活用が期待される。

籠川の魚たち

昔の籠川は、イワナ・ヤマメ・カジカなど限られた冷水性の溪流魚の生息域だったと思われるが、近年は放流も盛んになり、北安中部漁協によりイワナ・ヤマメ・アマゴ・ニジマス、そして上高地で有名なカワマス(アメリカイワナ)などが放流されている。そのためイワナの交雑種が多くなっている。イワナとカワマスの交雑でできた魚は生殖能力が著しく低下してしまう。



籠川で遊ぶ観光客

昔はヤマメが降海しサクラマスとなり、産卵のために信濃川、犀川、高瀬川、籠川へと遡上してきたものだ。大町市社にお住まいの曾根原文平さんによると、昭和九年に白沢において遡上してきたマス(サクラマスであろう)を取った記憶があると言う。昭和の初めまではサケも遡上してきたようだが、昭和十年前後を界にして各河川に発電用のダムができ、サケ、マスの遡上がなくなってしまった。

現在の生息域は大きく分けると、高瀬川合流点から奇沢の取水堰までが、イワナ・ヤマメ・アマゴ・ニジマス・カジカなどで、取水堰より上流が概ねイワナである。

ひところ少なくなつたと言われていたカジカが最近また取れるようになってきたのはうれしいことだ。



厳冬期の白沢(籠川出合付近)

籠川と釣り

岩小屋沢と扇沢は、砂防堰堤の連続のため釣り場としての魅力はなくなつてしまつたが、籠川本流はあまり人工物が無い恵まれた川である。

ヘアピンカーブ付近の三段堰堤より上部、岩小屋沢と扇沢の合流点の間に小さな砂防堰堤があるが、この堰堤から合流点の間がいちばん溪相が良く、落差のある落ち込みの連続である。生息するための条件が良いためか昭和五十年ころまでは四十七センチを超すイワナがよく釣れた。しかし籠川は他の川に比べると非常に釣りにくい川である。三段堰堤より下奇沢の取水堰の間は勾配がきついわりには大きな落ち込みがなく、流れが速く泡だつている。そのため魚の動きが速いからである。白沢は爺ヶ岳の懐から流れでる沢で道路より上は堰堤の連続で良い釣り場ではない。最



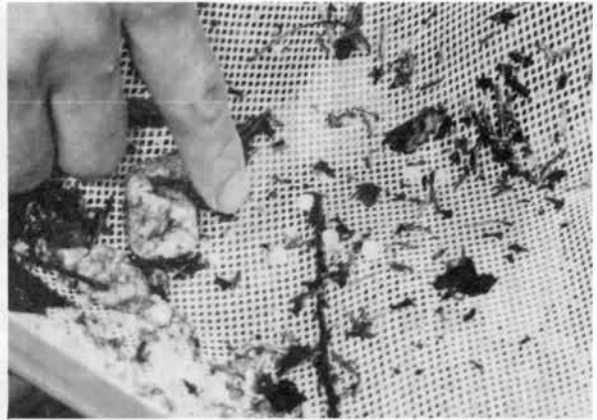
2時間の釣果

餌もあり本支流に産卵場所も多く、北安中部漁協の放流もあって魚の数は多い。私も毎年七月八月を除いて七百尾ほど釣ってきたが、今は小沢などに放し生産を計っている。そのため釣り針の返しは潰している。しかし放流の結果、原種のイワナがいなくなってしまうのが残念である。

大町の川のなかでは滝川はイワナが生息しやすい川だと思われる。水温もあまり高くないが、特別採捕許可証を取り滝川で調べたところ良く捕食しており肥満度、充満度も充分の結果が出ている。

イワナは冬期間はあまり捕食しないとされているが、特別採捕許可証を取り滝川で調べたところ良く捕食しており肥満度、充満度も充分の結果が出ている。

イワナの卵



上流の七番目の堰堤から上は非常に急峻になるため、大雨が降ると多量の岩石を流し出す。平成二年の夏には本流との出合いにあつた堤を流してしまった。この沢は狭く奥行が無いため厳冬期間には表流水がなくなってしまう。しかし伏流水があり大町の大事な水道水源になっている。

滝川で釣りをしていると、よく猿の群れに出会う。ひとつの群れは二十ないし三十頭、いくつかの群れがいる。いつもの年は寒くなる前に山を下りてきて、雪が解けるころに山に上っていくようだが、今年は異常気象のせいか下ってくるのが早かったようだ。十月の初めに白沢付近で大型観光バスにひかれそうになるのを見てドキッとすることがある。

カモシカもよく見かける。今年は春から夏を旧料金所跡から寄沢のあたりを寝ぐらとして居ついてしまった一頭がいた(写真)。



クマザサを食べるサル

昨年春に、北海道日高と上高地(梓川の一部)にしかない貴重種ケシヨウヤナギが五本見つかった。十年前に大町市史を作るにあたって調査した時にはなかったそうだ。なぜケシヨウヤナギが上高地から遠い滝川に生えるようになったかは今後の調査が必要である。



ケシヨウヤナギ



カモシカ

これら先滝川谷に入る人は益々増えると思される。猿やカモシカの交通事故や、貴重な植物の採取伐採のないよう注意を促す必要があると思われる。



籠川の水

籠川谷は蓮華岳・針ノ木岳・赤沢岳・岩小屋沢岳に囲まれていて冬期間の積雪量が多く、一年中水のとぎれることがない。籠川の水は農業用水と上水道に利用されており、上水道は大町市の四十二パーセントをまかっている。ちなみに上白沢は一日六千トン、白沢千二百トンとなっている。今籠川は発電所建設問題で揺れている。ヘアピンカーブ横の三段堰堤から水を抜き、それに白沢で取水した水を合わせ、旧料金所の上部で発電をするそうだが、白沢の水が取水された場合は地下水が枯渇する恐れがあると言われている。将来大町市内に下水道を完備するという計画もある。万が一にも水が足りなくならないよう注意が必要だ。

また、川に入ると缶・ビン・ビニール袋はてはオートバイまで捨ててあるのを目にする。一人で拾うのには限度がある。自然を求めて山や川に入るのである。「山菜水明」の町大町、その大町の山や溪谷が人の手で汚され破壊され、気がついた時は元に戻すことの出来ない「山死水迷の地」にならないよう心掛けたい。

上白沢の水源

八月号で書けなかった高瀬川の支流水俣川に九月十一日調査に入った。昭和三十年代まで黒部で職漁師として生活していた曾根原文平さんにご同行いただいた。前夜偶然にも湯俣の晴風荘において鬼窪善一郎さんとお会いした。鬼窪さんも曾根原さんと同じころ黒部で職漁師をしておられ、お二人は旧知の仲で昔話しに花が咲いた。そのお二人昭和四十年代の初めまでは確かに水俣川にイワナのいたことが確認できた。

翌日二人で水俣川を遡行し、千丈沢・天上沢まで入って調べたが魚影は見つからなかった。理由は昭和四十四年八月の豪雨(葛温泉が流された)でイワナがいなくなり、その後遡上復活がなされなかったためと思われる。(水俣川はPH5)

晴風荘の上流の噴湯丘に行く棧道が鬼窪さんたちの手で本年九月に改修されたことは有難いことだ。

おわりに七十六歳のご高齢にもかかわらず、吊り橋や棧道のなくなった水俣川を、十時間あまりにもわたりご同行いただいた曾根原さんにお礼を申し上げます。

(大町市在住)

追記



崩れた水俣川の登山道



曾根原さん(左)と鬼窪さん



修復中の棧道

博物館だより

40周年記念刊行

山岳博物館創立40周年を記念して次の二点を刊行しました。

『市立大町山岳博物館40年の歩み』

B5判並製 119ページ 一部カラー印刷
山岳博物館40年の沿革・主な活動の記録。

『カモシカ 氷河期を生きた動物』

A5判並製 208ページ カラー印刷
ニホンカモシカの生態・生理病理・飼育を中心にしたわかりやすく記述。山岳博物館編。

40年の歩み



『40年の歩み』は原則として公的機関に限りおわけします。ご希望の方はご連絡ください。

(無償・送料別途)

『カモシカ』は信濃毎日新聞社から市販されています。ぜひご覧ください。(二千五百円) また、当館編『ライチョウ』も二月上旬に刊行を予定しています。

山と博物館第36巻第11号

発行所 長野県大町市 一九九一年十一月二十五日発行
大町山岳博物館 TEL026-221-1111
印刷所 長野県大町市俵町 大町山岳博物館
大米タイムス印刷部
定価 年額 一,三〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野四)一三三九九(三)